

どちらが安全か？

「家の前に1mの堤防がある街と、9mの堤防がある街、どちらが安全ですか？」

命を守るための「本物の流域治水」と市民のチェック】

③ 高い堤防、満杯のダムが牙をむく「破壊的なエネルギー」

宮本氏はスクリーンに2つの家と堤防の絵を映し出し、会場に問いかけた。

「一見、高い堤防が安全に見えますが、技術者の視点から言えば逆です。高い堤防は壊れたときの破壊力が桁違いに大きい。川の中に洪水を押し込め、堤防を高くし、ダムで人為的に水のエネルギーを溜め込む治水は、極めて危険度を増している」ダムが満杯になれば、上流から来た大洪水がそのまま一気に吹き出す「異常放流」が行われる。防ぐのではなく、どうやって大雨を「しのぐ」か。川の中だけで解決しようとせず、農地や森林に水を安全に預け、地域の特徴に合わせた土地利用や街づくりを住民と行政が一緒につくることこそが「本物の流域治水」だと熱弁した。

④ なぜ行政は対話を拒むのか？「結論ありき」の壁を崩す

住民が共同検証を求めても、国や県が応じない理由を宮本氏はこう一喝した。「役人は現地を見ていない。そして、現地をよく知る住民と事実をすり合わせたら、自分たちの作った『ダムありきのフィクション』が崩れて説明できなくなるからです。最初から結論を変えない前提だから、対話にならない」

宮本氏が25年前に立ち上げに尽力した淀川水系流域委員会では、行政が最初に原案を作らないという画期的な手法を取った。住民と「知っていること」「心配なこと」を現地で徹底的に共有し、そこから対策を積み上げたという。「行政が隠さず情報を公開し、住民との信頼関係を作ることが大前提です」

⑤ 現地に降りて、川底から107.5mの壁を想像してほしい

講演の最後、宮本氏は一人の人間としての素直な恐怖を語った。「私は技術者ですが、あの球磨川の美しい溪谷に、高さ107.5メートルのコンクリートの壁ができるとすると、理屈抜きに本当に『怖い』と感じます。皆さん、ぜひ道路から見るのではなく、川底に降りてみてください。そしてそこに、巨大な壁がそびえ立つ姿を想像してほしい。普通の感覚なら、おかしい計画だと気付くはずですよ」

社民党熊本県連合代表

今泉克己

行政が示す「数字のフィクション」に惑わされず、住民の手で、命を守る「本当の流域治水」の未来を選択しましょう。

